

人患赤白遊癰及癰腫毒腫，取十餘枚，令啗病處。取人皮皺肉白，無不差者。冬月無蛭，泥中掘取，暖湯令動。先洗人皮膩，以竹筒盛蛭，啗之須臾咬，血滿自脫，更用飢者。今案經心方云，以水蛭食去惡血」とある。

「医心方」に引用された「本草拾遺」は、唐・陳藏器が開元二十五年（739年）に撰述した本草書（亡佚）であるが、「經史證類備用本草」卷第二十二「水蛭」の陳藏器注に「医心方」の引用文とほぼ同文が載っている。

「經心方」は「旧唐書經籍志」に「經心方八卷宋俠撰」とあるのがこれである。宋俠は北齊の頃（550～577年）洛州清漳の人である。

我国における蛭飼の最も古い記録は、宝龜二年（771年）大友路万路が内股の瘡に蛭食治療をするため五日間の休暇を請願した申請文である（大日本古文書十七巻）。

平安・鎌倉の時代になると古記録に頻々と表れ、「玉葉」や「明月記」にも多い。

口腔領域への適用は両書に見られるが、殊に「明月記」には多い。

「玉葉」寿永二年（1183年）九月一日、「依口熱，齒下澹蛭」。「明月記」建仁二年（1202年）五月七日、「顔有邪熱，仍飼蛭」とある。

「明月記」嘉祿二年（1226年）八月十二日には「未時許飼蛭，齒并耳後熱氣多所也。日入以後，禪尼又風病反吐，燒薪出汗，今夜予又心神頗違例，老後之身，若依蛭違例歟」とある。

蛭飼は著効が見られることもあったが、時には直後に心神の異和を生じ、虚脱・失神を起すこともあった。次の例は更に重大である。

「玉葉」治承四年（1181年）七月十二日、「今日申刻，行頼頓死，此五六日有熱腫，不及殊大事之間，今日蛭澹之後，不覺成了，忽以出家，臨終尋常，爲悦々。余最前之從，廿五年積奉公，今年六十七，可哀々々」

藤原兼実の上司であった源行頼が、熱腫により蛭飼をしたところ急死したというのである。

上記のように蛭飼は古代から中世半ばまで広く行われた治療法で、多くの日記や往来物に記録されている。

これらの記録を総合すれば、蛭飼は体表における炎症の治療法として用いられたが、その適応時期は膿瘍形成以前の初期で、膿瘍が形成されてし

まうと鍼をもって切開排膿されるのであった。

中世以後、蛭飼治療が廃れた理由は、第一には屢々不快な後遺症を生ずることがあったからであろう。記録によれば蛭飼の直後、全身異和、疾病の増悪、心神虚脱等が頻発している。蛭飼は必ずしも安全な治療法ではなかったのである。

第二の理由としては、中国唐代には内経医学は衰え、鍼術が廃れて灸治が増加した。鍼は単に局所の刺絡や切開に用いられるに過ぎなかった。炎症の初期には局所への多肛灸が用いられたが、口腔内では灸ができないため蛭飼が用いられたのであろう。

十六世紀に至り、御蘭意齋や曲直瀬道三によって後世派の治療が行われるようになり、医術は飛躍的に進歩した。この頃から口中科の処方が増え、鍼術も多彩となって、蛭飼よりも安全で効果的な治療法が確立し、蛭飼は次第に行われなくなったものと思われる。

23) 中国における走馬疳について

鶴見大学 ○別部 智司
佐藤 恭道
森田 武
戸出 一郎
雨宮 義弘

古典医学書に記載された病名は、死語になることの多い中で「走馬疳」、「走馬牙疳」は尚も存在して、現在中国の歯学部教科書あるいは学術雑誌の中に記載されている。今回は、この病名の古典における解釈および現在の病名について考察を加え報告をした。

走馬疳の最初の記載は「太平聖恵方」で、宋代初期（西暦987～992年）に王 懷隱らにより編纂され、病理、病因、病態、治方に関して記された医学全書である。全100巻、1,670門、16,834方に分類されており、歯牙疾患は卷第三十四に記載されていた。「口齒論」から始まり歯牙疾患中、疳は牙齒風疳、牙齒急疳、齒漏疳と3つに分類されていた。これらは口齒論のかかなりの部分を占めた記載がなされていることより、当時多くの症例が存在していたと推察できた。また、これらの病因は隋の時代に編纂された「諸病原候論」と同様に内経医学に基づく医説が引用、展開されていた。

走馬疳は牙齒急疳を治する諸方の中に「走馬疳」「牙齒走馬疳」として述べられていた。牙齒急疳の内容は「それ急疳は、風熱蘊積により、脾肺壅滯し、邪毒の氣、口齒に衝注し、遂に疳と成るなり。その候、唇口忽ち青白に変じ、齒斷腫滿し、膿血ともに出で、朽爛疼痛し、唇頰のあたりに赤白色あり、或いは黒脈あり、即ち須く針して惡血を却くべし。然らずんば、之を烙せ。若し早く療せざれば、旬日に死す。故に急疳と名づくるなり。」と記述されていた。即ち、牙齒急疳とは上焦が風、濕、熱に侵かされて、齒周組織の重篤な炎症を呈する疾患で、疼痛、軟組織の腫脹、齒根露出、齒肉出血、排膿、齒槽骨、顎骨周囲軟組織の炎症がある。また、甚だしい場合には潰瘍となる。走馬疳は牙齒急疳の代名詞であって、これらの経過が速いものを指し、範囲が口唇、鼻、頰部に及び、進行すると顎骨が露出し死に至る事もある。また、小児に多くみられた記載もなされていた。走馬の由来は「太平聖惠方」以後に編纂された「證治準繩」巻92にも記載がなされていた。

牙齒急疳の治療法は16方あり、この内の2方が「走馬疳」「牙齒走馬疳」の治法であった。これらの治法は内服による治方ではなく、外用による治法であった。

現在、中国では一般名が走馬疳、走馬牙疳で、学名は壊死性齒肉炎となっており、本邦における壊疽性口内炎、水瘡などを指す。

以上、走馬疳なる病名は「太平聖惠方」に始まり、以後引き継がれて、現在でも走馬疳或は走馬牙疳の病名として受け継がれていることを発表した。

24)『耄耋独話』(杉田玄白)にみえる齒科記述

Dental Health in Bōtetsu-Dokuwa by G. Sugita

大阪市 杉本 茂春

Shigeharu Sugimoto, Osaka

順天堂大学、酒井シヅ先生から贈られたコピー、杉田玄白の直筆になる老人保健体験記『耄耋独話』は貴重な医史的資料で、齒学の分野に於いても注目すべき内容である。

総序部分抄；「翁は、享保18年(1724)癸丑9月13日の生まれにて、今年文化13年(1816)正月9日の節分までに、齡は84歳その日数は29,919日になりぬ、生得健実なるにあらず、積聚などいえる宿疾もあることは常人に異ならず、時々発動することもありて、さして養生に心を用いしということもなく、年若き時は少しは酒も用いしが、天性好まざるところありしにや、中年過ぎよりは絶えて吞まず。常にこれぞといえる格別の得食なもし。唯その時の菜物一色か二色あれば事足りつと覚え過せり。近來の常食は大方女子扶持1人分には少し不足なるべし(略)さて、翁はまでさせる事もなく不知不識してこの寿を保つの幸を得たり、これみな天の己に按配し給うところなるべく、世の人人この事を得わきまえず、みだりに寿齡を求めんとて心志を勞するは無益なるべく、翁の如く老行く先への己の意の如くならざる味を知らずして、羨み希う人々の為に此の一篇を筆に任するものならし。杉田九幸翁」

口齒部分；

「又、口は命を繋ぐの元にして、もっとも重きところなり。

されば、人初めて生まるれば、天より乳汁をあたえて直に吸わせ、この乳哺の養いによりて生長し、さて、生育にしたがい有形の物を食うべき程になれば、自然に齒というものを生ず。

これを剛く堅きものを食うようになれば齧(齒かわり)ということありて、別に堅実なる齒牙を抜き換えて揃い給えり。その頃に至りし程は人ごとに朝夕何の心もつかず、いつまでもかくあるもののように思いて、ほしいままに堅剛の物を食うなり。然るに誰しも初老の頃になれば少しずつのなやみ出で来るものなり。はて翁はこれに反し、幸に耳順(60歳)の頃に至り、初めて齒には少しずつのなやみ出で来たりしに、それより後、今年是一本一本と数え、遂には去月は一本今月は二本と欠け始めて、今は早や一本も残りなく落ちつくしたり。これによりて硬き物としては少しのものを食うことならぬようになりぬ。

されど、これまで珍膳佳肴より名菜美味をも食い尽くし、八十にあまれる齡を経たせばこれという望みの物もなし。ただ当時三度の食口中にかなうものばかり食すれどもその度ごとに如何よう心をつけても齒という垣のなくなれば時々食